

住・まちづくりフォーラム かわら版(仮題)

ニューズレター 第3号 1994年6月9日



特集 第3回住教育フォーラム

○ワークショップを考える

—ワークショップの街づくり学習における有効性と手法類型—

発行/財団法人 住宅総合研究財団

3

第3回 住教育フォーラムの記録

主催 (財)住宅総合研究財団 住教育委員会

テーマ ワークショップを考える
ーワークショップの街づくり学習における有効性と方法類型ー

- ・日時 4月11日(月)午後6時～午後9時30分
- ・会場 当財団会議室
- ・講師 計画技術研究所所長 林 泰義氏
千葉大学園芸学部助手 木下 勇氏(住総研住教育委員会委員)
- ・討議 参加者全員による
- ・司会 学芸大学教育学部教授 小澤紀美子(住総研住教育委員会委員)
- ・コメンター 熊本大学工学部教授 延藤 安弘(委員長)
- ・ファシリテーター 筑波大学付属小学校講師 町田万里子(委員)
- ・記録 跡見学園短期大学講師 加藤 仁美(委員)
- 参加者 建築系・教育系などの研究者・実務者、並びに大学院生・学生、街づくりなどの活動家、関心のある主婦の方など34名

司会の小澤先生のコメント 今回は、「ワークショップ」について語り合おうと、「ワークショップって何？」というところから話を始めましたが、私自身も今日は勉強になりました。会場も、講師の林さんと木下さんをはじめ、すごい専門家の方が大勢お見えで、非常にご熱心にアクション・オリエンテッド・ラーニングまでやって頂いて、楽しいひとときが過ごせました。おかげで、私は司会者から時を忘れた時間係になってしまいました。

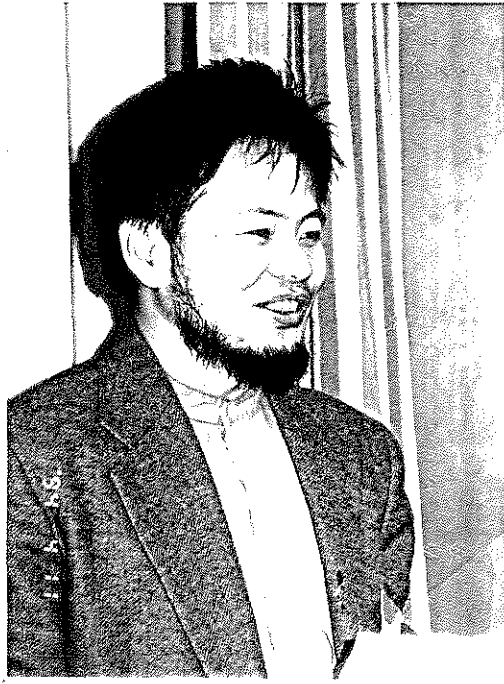


司会の小澤先生

次回予告は裏表紙に

- ・この「住・まちづくりフォーラムかわら版」は、住教育フォーラムの開催記録を仮にまとめたものです。将来、何回かのフォーラムの成果と、各委員の皆さんによる研究論文を合わせて、書籍として刊行する予定ですので、ご期待下さい。
- ・また、次回のフォーラムのご案内状も兼ねています。裏表紙をご覧ください。

- ・表紙デザイン、裏表紙カット＝町田万里子・編集・文責＝事務局 間宮 昭朗
小菅寿美子



千葉大学園芸学部助手 木下 勇氏



計画技術研究所所長 林 泰義氏

では、折角のワークショップですから、皆さんにちょっと作業をやって頂きたいと思います。

皆さんの机の上に色紙がありますので、好きな色の紙をとって、3分ぐらいで、「ワークショップとはこんなものだ」というイメージを紙1枚で形に表して下さい。丸めても、折っても結構です。

◆グループごとに発表していただきました。

1グループ



2グループ



3グループ



4グループ

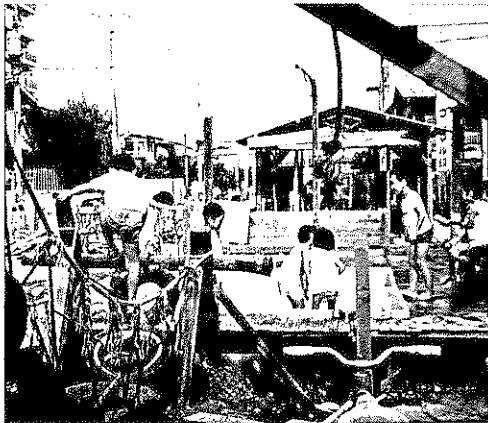


5グループ



各々の講師の方に、具体的なワークショップの事例をご紹介いただきながら、ワークショップの楽しさや難しさ、その方法論と有効性について考えました。

林 泰義さんのスライドから……

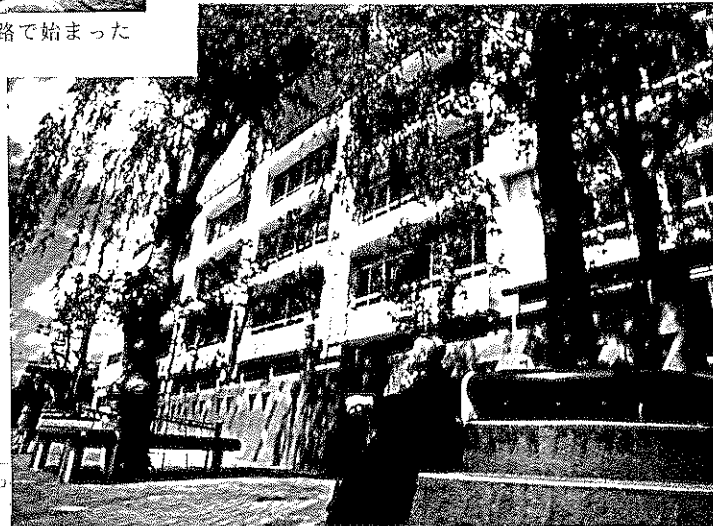


▲東京都世田谷区経堂の水道路で始まった冒険遊び場の活動(1975年)。

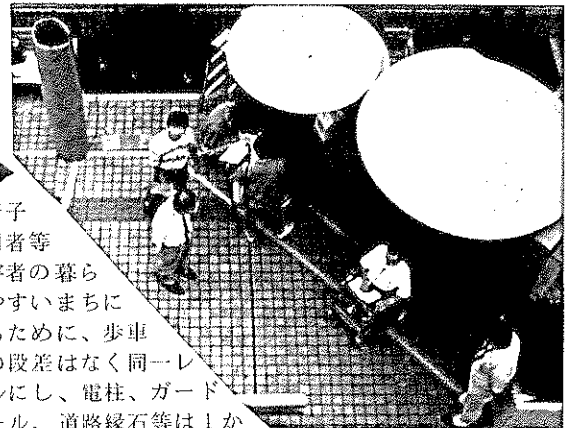


▲世田谷区羽根木公園で始まった雑居まつり(1975年)。1980年には、黒テントで劇団と地域の障害者で演劇ワークショップが開催された。

▼世田谷区では、1992年12月に世田谷まちづくりファンドがスタート。住民のまちづくり活動に資金助成をし、その発表会が1993年3月に行われた。同区奥沢7丁目には「ネコジャラシ公園」が住民主体の活動でオープンした。



◀世田谷区梅ヶ丘「ふれあいのある町づくり」80種の野草をタイルにする等の活動も行われ、梅丘中学校前の道は、都市計画道路の計画線通りに拡幅すると、思い出の柳や校庭の銀杏の木が無くなってしまおうという住民の熱心な討議を経て、樹木は残り、活かされた。

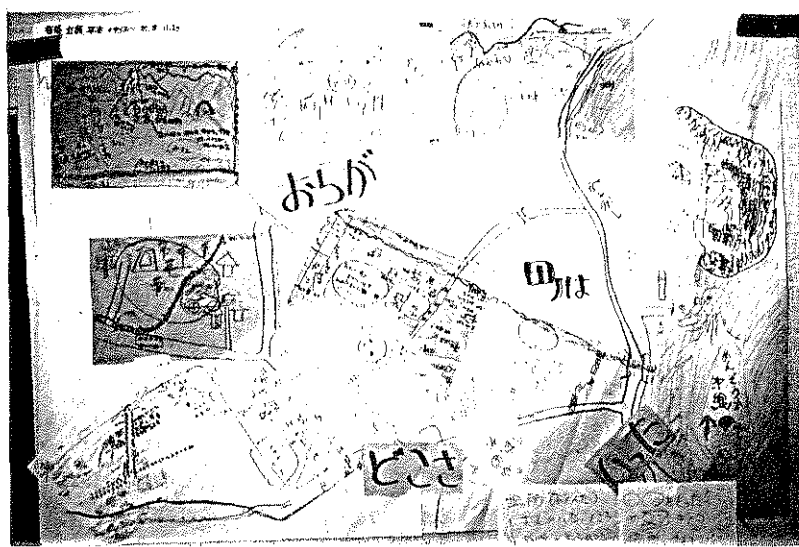


車椅子利用者等障害者の暮らしやすいまちにするために、歩道の段差はなく同一レベルにし、電柱、ガードレール、道路縁石等は1か所にまとめて歩道を広くし、公衆電話は、公開実験を経て、扉のないオープンなものになった。



4 その他にも、1970年題に廃材で市民が森のスポーツコースを自力建設した事例、大地沢青少年センター・ワークキャンプのお話をさせていただきました。

木下 勇さんのスライドから…



どきさシンポジ
が少道の未来編



木下勇さんからは、

- ▲世田谷羽根木公園「太陽の市場」(1981)：フィリピンのPETA（フィリピン教育演劇協会）のやっているワークショップ方式を導入。障害者と健常者が一緒になって芝居をする演劇ワークショップ。アメリカのランドスケープ・アーキテクトの環境づくりの方式（コミュニティ・ワークショップ）との共通性。
- ▲世田谷三軒茶屋「三世代遊び場マップ」：児童遊園の計画をワークショップで。形式にこだわって大変だった。
- ▲世田谷太子堂「水のない川を考える会」：ワークショップの形式にこだわらずオリエンテーリング方式で。反対派と推進派で環境の点検会。
- ▲世田谷区街づくりの職員研修：車椅子に乗って町に出る等。
- ▲港区「町づくり構想」研修：ワークショップ形式の限界。

- 演劇的方法でミュージカルを区長の前で上演。
- ▲IPA世界大会ワークショップ(1989)：ワークショップ・セッションを作って参加者募集。演劇的方法で農村の貧困問題等に取り組んでいるフィリピンのPETAを招待。理論の原点はパウロ・フレイレの思想。文化は文字の文化だけではない、身体表現でコミュニケーションはできる。タイの国連支部で実施されていたワークショップ方式による農村の開発。
- ▲「思い出地図づくり」：コミュニケーションゲームにPETA流のものを取り入れる。町へ出て発見し全体でイメージをまとめる。
- ▲太子堂キツネ祭り：マンネリ化の中でイメージ探検隊の方法をドッキング。

など多くの事例のお話をさせていただきました。

討 論

(■参加者、●講師)

■矢田：一番扱いにくい人はなかなかワークショップに参加してくれないが。

●林：全く興味を持たない人もいれば、子供や高齢者のことで活動している人もいる。このように、住民の中で自然に役割分担のあることが、ちゃんと動いているコミュニティであって、みんなが来る必要はないと思う。

■斉藤：いつも同じ人しか参加してくれなくとも歩くことによって、ちょっと振り向いてくれる人もいるかもしれない。一人ひとりが歩くことから始めたい、一人ひとりが子も連れて、道を歩けば道連れに、いつかはできるさ町づくり。

■大倉：大人も子供も同じ立場で参加して、一緒の話し合いはできるのか。

■山口：町づくり学校のワークショップを開校したいが。

●木下：まだ日本では子供が参加して、大人と対等に話すという事は少ない。でも、子供は大人以上にリーダーがすごくあって大人がドキッとするような発言をする。大人と子供がワークショップで共通体験することにより、大人が逆に子供を見て理解していくということもある。これを繰り返していけば学校もできてくるのでは。ドイツでは、ペガコーディシアクションという、子供たちが町の縮図のようなものをつくり大人の世界をシュミレーションして、その中から現実の大人の社会を見ていくという方式もある。

■清水：楽しかったで終わってしまっは意味がない。大切なことはプログラムや成果をどうやって活かすかである。

■田中：主催者は結論を予測しているのか。参加者には見えない枠組みを持っているのでは。

■野村：予測しないで始めるべきだと思う。すごい知識や体験をもつ例えばおじいちゃんやおばあちゃんの話を引き出すということがまず大事で、その後どのように有効な方向へ繋げていくかということが必要である。

■小野：例えば計画の期間が決まっていて、ある程度筋道が立っていてそれに乗せていく形で行っているのではないか。そういう時にもすごくそのことに対して利害の切実な人がいて、その筋道にうまく乗っていかない人というのは、自分の主張を延々と繰り返して、そのためにワークショップが空中分解してしまうことがあるのではないか。こういう場合ワークショップというのほどここまで有効なのか、またどういうやり方をすればその人たちがうまく引き込めるのだろうか。

●木下：ワークショップの1つのメニューに「アクション・リスニング」というのがある。グループからはずれている人の言い分を聞き役として聞いていると、その背後にあるものが見えてきて、

さらに徹底すると問題の対策等も出てくる。

●林：そういう人は、法律とか行政手続きで物事が決められることについて、理不尽と思われる場面が沢山あり、それを訴えているのである。ワークショップで違和感を持って入りきらない人がいるときは、必ずちょっと横へ行って話しをつける。そうするとものすごく色々なことがわかる。

■中村：できあがった空間も古くなってまた改修の時期が来る。そういうプロセスは携わった人が子供に語り、周りの人に語ることによって続いていく。そういう目に見えないものが、ワークショップの効果、宝ではないか。

■野村：ワークショップを何回か積み重ねて、戸惑ってぶつかりながら意見交換をしていく。一緒にご飯を食べたりお茶を飲むことによって、その人の癖をお互いに知り合うということ積み重ねながら、会話の内容は具体化していく。

■田代：自分に直接利益のない問題だとなかなか参加しないのが現状だが、関心のない人や反対意見の人をどうやって巻き込んでいくのか。

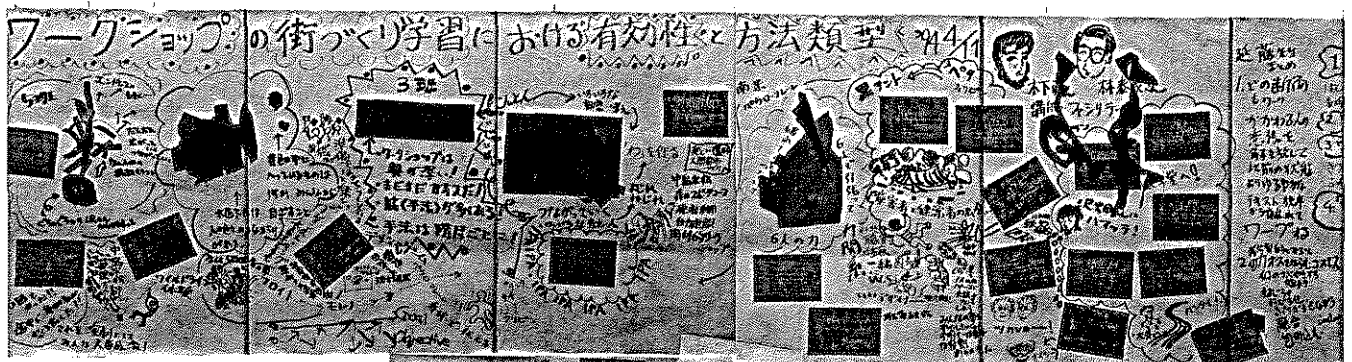
■梅津：ワークショップは楽しいという人がいる反面、しらける人、真面目でないと出席しなくなる人もいる。こうした人たちも積極的に参加できる手法はないだろうか。

●林：「僕たちの町づくり戦略—あなたの町が誘拐される」という中学校の教科書の訳本がある。そこには、しょっちゅう気をつけて役所や地域の議員さんときちんとネットワークを張っておかないといけないという忠告が書かれている。基本的な日常生活の事柄の中に、町づくりのいろいろな問題に入っていく、ワークショップのような色々な表現の仕方を勉強する、そういうのが蓄積としてあるかないかでは、随分違うと思う。私たちの場合は、その辺が全然ない状態である。

■梅津：利害が対立する問題をどう調整して、新しい人間関係をつくっていくかということになると、どうもワークショップという手法だけではだめなのではないかという気がする。

●木下：ワークショップは、単に1つの手段である。目標点に向かって、出発点からあっちへ行ったりこっちへ行ったりとやっているうちに、色々な方向が出てきて、最終的に何を改善したいのかが分かる。色々な議論、知恵を出し合って問題解決へ向けていくということである。本来一方的なものではなく、参加者の相互作用である。「普及」とか「伝える」ということではなく、双方向の「対話」方式で作っていくことである。でも、何を解決したいかという最初の狙いをはっきりしてから取り組まないと、単なる遊びととらえられてしまうこともある。その辺は、仕掛けるときに注意しなければいけない。

◆フォーラムの最後にこのようなボードができました。



Q：ワークショップのやり方に拒否感を感じる参加者にどうしたらよいか？

A：まず第一に基本的にワークショップを開催する前に、どういう人達が参加するかによって、ワークショップ・プログラムを吟味することです。例えば、こういうことがあります。

「（行政への）信頼性にかげりのある地域では、非伝統的な会合形式に対しては、どれほどその生産性に確信性が持てる状態であっても、住民側の抵抗が予想される。特に、決定案や行政機関に対立する聴衆は、小グループに分ける方法を「分離懐柔」戦術とみなす可能性がある」（ジェームズ・L・クレイトン（1981）：住民参加マニュアル—アメリカにおける理論と実践—（原題：Public Involvement）：横浜市企画財政局企画調整室訳・発行1992, p. 92）

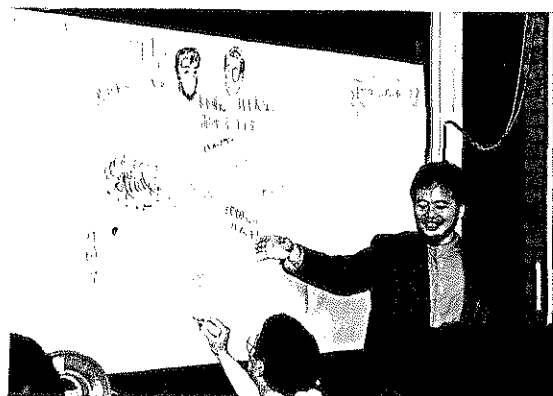
つまり、ワークショップのプログラム（スコア）である所でうまくいったので、またそれを、とあって、方法に固執すると思わぬ失敗をすることもあります。ワークショップだけが問題解決の方法ではないし、またワークショップのプログラム（スコア）にも様々な形態があります。多くのプログラム（スコア）の手法を身につけ、参加者の状態に応じて使い分けるとよいでしょう。事前にチェックできればよいですが、場合によって当日、参加者の反応から、次のプログラム（スコア）を変更したいことがあります。臨機応変に対応できるプログラム（スコア）を用意しておくといよいでしょう（ハルプリンはこれをPick Pocket Scoreという）。

第2に、ワークショップ・プログラムの内容です。

まず、参加者の期待していることをつかみ、それに向かって進むこと。そして、参加者は最初、緊張しているので、緊張を徐々に解きほぐしていくような、プログラムの流れをつくることです。参加者にとって自然な流れかどうか、ワークショップ前にプログラムをテストしてみることで、吟味できます。

米国で地域づくりに使われているワークショップがある面では「専門家が都合よく利用し、住民にとっては参加を求められるというより処理されていると感じる危険性がある」（ジェームズ・L・クレイトン前掲書p. 108）という問題もあります。これも、ワークショップの中で、その都度その都度参加者と評価と意志決定（Evaluation, ハルプリンはValueactionという）をしていない所に起因します。これを進めて、次のスコアも参加者の合意のもとに進めることができるようになるといよいでしょう。

第3に、ファシリテーターの役割です。ファシリテーターの役割は、リーダーでなく、参加者が主体的に参加するよう見守り、促す役割です。特に重要な点は、「決して落ちこぼれを出さない」（ハルプリン）という点です。6人前後のグループに必ず、ファシリテーターが1人つくことが基本です。そして、参加者がついていけな



いような気配を感じたら、全体進行係（プロセス・マネージャー）と作戦タイムを設けてプログラムの変更を協議します。ファシリテーターと少し、違う役割に後方業務（logistics）、記録（Recorder）のスタッフも必要です。これらスタッフも情報（得た成果、資源）を参加者に分配（Share）する重要な役割です。

以上の3点を守れば、参加者に拒否感を持たれるワークショップとはならないはずですが。多くは方法に固執するあせりが問題を招きがちです。スタッフで参加者の反応を充分、察知して進めて行く、気配り（これが結構疲れるのですが）が重要ということです。

しかし、それでもワークショップ・プログラムに乗れない参加者が1人ぐらい、いるものです。特に、自分中心に事が進まないと気がすまない人や、何等かの主張を抱えている人などの場合には、その主張を聞く、アクティヴ・リスニングなども必要かもしれません。全体の参加者に投げかけるか、またはファシリテーターが対応するかは状況に応じます。

Q：ワークショップに関心を示さない層にどう参加してもらうか？

A：ワークショップ開催前に充分、宣伝活動を行ったでしょうか。開催日時、主旨（地域住民にとってどれだけ関わりがあるか等）、方法を広告し、参加を公平に募ることです（人数に制約があるので、回数や参加者選定方法には工夫がいる）。そして時には、本当に参加してほしい人への事前のアプローチも必要となります。その参加者との関係づくりこそ、ワークショップを何のためにやるか、と関連して、ワークショップのプログラム以上に重要なことです。我が国では、この関係づくり（コーディネート）の点がおろそかになっているような気もするのですが……。

また、ワークショップは参加人数に限りがありますので、米国ではワークショップと平行して、アンケートによる意見集約も行って、その相互の情報のクロスした工夫もみられます。

延藤先生の まとめ



ワークショップの達人でもある講師お2人の豊かなプレゼンテーションと、参加者の皆さん自身が手を動かしながらワークショップをめぐって心地よく駆け抜けてきたことに、ある種の思想観を共有できたような気分しております。

とても議論が幅広く、全体をまとめるゆとりはありませんが、今後に反芻に値するような、いくつかの論点をすくい上げて、まとめに代えます。

◆ワークショップは人の意識や空間をワープ（飛躍）させる仕掛け

ワークショップの定義について響くような言葉がたくさん語られていましたが、まとめてみると「関わる人々の意識を解き放って、周りの状況をさりげなく、しなやかに変える方法」ではないかと思います。言い換えると「参加する人々によって、問題解決に向けての目標を判断し、参加者の緩やかな、多様な相互作用と、身を乗り出した能動的な対話の繰り返しの中で、関わる人々の自由発想をエネルギーにしつつ、響き合う世界のデザインに至るとというのが、ワークショップの方向」であり、また「常識とか、テキストを逸脱しながら、予想もつかないような、別の意識や、空間に人々をワープ（飛躍）させてしまう、人の意識や空間をワープする仕掛けではないか」と言うことが、全体を通して語られていたのではないかと思います。

◆まちづくりにおけるワークショップの効果

では、そのワークショップが、まちづくりや住まい、まちづくり学習という点で、いかなる効果をはらんでいるかということについては、以下にあげることができます。

- ・個々の吹きやアイデアから、ねじらせ、よじらせながら、新しい秩序を産み出している。
- ・物と人、人間と自然というように分けて考えるのではなく、その間を繋ぎ応答する(respons)するという役割を担える。
- ・お互いに包み合うことで、人間、空間、社会を変えていく本質的な仕掛けである。

◆まちづくり学習におけるワークショップの動力源と手法の特性

そういったこれからのまちづくりや学習において、極めて普遍的な意味を持つワークショップの動力源は何だろうか。その手法の特性は何か。その点について、語られたことの一つ一つの柱だけを頭だししておきます。

- ・柔らかな新しい手法が次々産み出され、開かれた手法が体系づけられてきている。
- ・企画運営面では、用意周到性と自由闊達なアドリブ性が必要である。
- ・あらゆる人の言葉に耳を傾ける存在がプログラムを円滑に進行させる。
- ・共有の感動体験と表現の工夫により、予想外の着地点を見いだすことが可能である。
- ・大人から子どもまで全ての人を巻き込むことで、地域社会の人間関係を回復再創造する要となり得る。
- ・狭義のデザイン・ゲームと、広義のまちづくりプロセスという二重性の意味がある。
- ・どれだけ幅の広い人に参加してもらうかについては、ワークショップの成果をどう発信し、どうメディアを活用するかが問題であり、それは今後の課題といえる。

語られたことの問題の多さに対して、ほんの僅かしか言えておりませんが、今後備えて議論を深める機会をさらに持ちたいと思います。ありがとうございました。



住むことへの思いやりの心を 次代のよき住まい手と作り手を育む

フォーラムの開設に当たって

当財団では、この度、標記のフォーラムを開設し、新たな活動を開始することといたしました。よろしくご協力のほどお願いいたします。

思い起こしてみますと、われわれ日本人は、第2次世界大戦後、急速かつ大量安価な住宅供給のニーズのなかで、いとも安易に古来からのモジュールによって支えられた日本間と、そこに展開される生活習慣に訣別すると同時に、住まい方に対する規範を失ってしまいました。

家の中での作法や禁忌は、省みられることなく、経済最優先の社会構造、家族や家庭の機能の変化は、住まいや近隣、あるいは地域に対しての敬虔な態度を、ともすれば忘れさせてしまいました。その結果、この約半世紀という時間は、日本に経済的な繁栄をもたらしたものの、地球環境や精神世界で、取り返しのつかないほどの大きな荒廃を生み出しつつあるともいえます。

残念なことに、次代を担うべき子どもたちの住まいに対する親密な気持ちや慈しみの心もまた、いつの間にか失われてしまいました。「住まい」とは、当然、住宅だけでなく、住んでいる・暮らしているところ全て、まさに社会や環境そのものです。社会の中で個人が、市民としていかに住まうのか、さらには、家族や近隣・地域を含めて人間としてどう生きていくのか、住まい=社会=環境と人のあり方を幼いときから生涯をかけて、学び直す必要が痛感される次第です。

本来の人間としての思いやりの心と心豊かな暮らしを取り戻し、次代のよき住まい手と、よき住まいの作り手を育むことが、今こそ問われているといえます。このフォーラムが、皆様のご支持を得て少しでもお役に立つよう願ってやみません。

・なお、このフォーラムは、当財団の住教育委員会によって企画運営されています。次の皆さん方を委員にお願いしています。

委員長	熊本大学工学部建築学科教授	延藤 安弘
委員	東京学芸大学教育学部家庭教育学科教授	小澤紀美子
〃	千葉大学園芸学部助手	木下 勇
〃	跡見学園短期大学家政科講師	加藤 仁美
〃	筑波大学付属小学校講師	町田万里子

1993年8月23日

財団法人 住宅総合研究財団
専務理事 大坪 昭



テーマ

人が知的になるとはどういうことか

— 認知科学の領域から住まい・まちづくり学習へのメッセージ —

この住教育フォーラムでは、子どもを含む住み手の住まい・環境への能動的関わりの意識を高める方法について議論を重ねてきました。1回目は「公教育」、2回目は「ネットワーク型まちづくり」、3回目は「ワークショップ」の実情把握と、住まい・まちづくり学習の課題のひろがりをおさえてきました。それらを通して本フォーラムの1つの視点として、“Action Oriented Learning”（AOL、楽しい活動・経験を重ねつつ生き生きとした状況の中で意識づくりを行う学習）がかすかに見えはじめてきています。

そこで、今回はこの視点に1つの理論的フレームワークをかぶせ展望を見出すために、認知科学の領域から東京大学の佐伯胖先生にお話をさせていただくことになりました。

*

佐伯先生は、東京大学教育学部で認知科学の研究・教育に携わっておられ、その分野の世界の最先端の理論であるLPP（Legitimate Peripheral Participation、正統的周辺参加）の理論の開拓者として活躍中の方です。LPP理論とは、人が生き生きと活動する状況を生かし、その人が関心を持つ周辺の事柄から始め、ひとつひとつの営みを通じてコミュニティづくりに参加していく中で、人は「その人らしさ」（identity）を獲得していくという考え方です。いささか難しそうに聞こえますが、住まい・まちづくり学習の領域とその外側の領域のクロスオーバーの議論によって、私たちが模索せんとしている方法的像が鮮明に浮かび上がってくるのではないかと思います。今までの本フォーラムにご参加いただいた方々を始め、このテーマにご関心の深い方々がお集まり下さると幸いです。お待ちしております。

記

- | | | | |
|-----------|----------------|--------------|--------|
| ・日時 | 7月1日（金）午後6時～9時 | | |
| ・会場 | 当財団会議室 | | |
| ・講演 | 東京大学教育学部教授 | | 佐伯 胖 氏 |
| ・コーディネーター | 熊本大学工学部教授 | 住総研住教育委員会委員長 | 延藤 安弘 |
| “ | 東京学芸大学教育学部教授 | 住総研住教育委員会委員 | 小澤 紀美子 |
| ・ファシリテーター | 千葉大学園芸学部助手 | “ | 木下 勇 |
| “ | 筑波大学付属小学校教諭 | “ | 町田 万里子 |
| ・記録 | 跡見学園短期大学家政科講師 | “ | 加藤 仁美 |

- ・ご不明の点がございましたら、下記までご連絡下さい。

財団法人 住・宅 総合 研究 財団

〒156 東京都世田谷区船橋4-29-8

電話:03-3484-5381 FAX:03-3484-5794 事務局 間宮 昭朗
小菅 寿美子

住・まちづくりフォーラムかわら版（仮題） 3
1994年6月9日発行（非売品）

発行人 大坪 昭
発行所 財団法人 住 宅 総合 研究 財団
〒156 東京都世田谷区船橋4-29-8
電話:03-3484-5381 FAX:03-3484-5794

